
“ 破砕者 ”

ぬん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

“ 破砕者 ”

【Nコード】

N 8 6 6 3 E

【作者名】

ぬん

【あらすじ】

左手に包帯を巻いた少年ゼロの物語。帝国と王国の戦争の中で自分は何者なのか知り、帝国に喧嘩売ります。

第一話（前書き）

思いついたままに書いてるんで、読みにくかったり、まとまりない
と思いますがすいません。

第一話

いつもの悲鳴…

目の前の人は形を成すのをやめていた…

何もしてないのに…

全てはこの左手……

全身黒い鎧に身を包んだ少年…彼の名前はゼロ。左手にはボロボロの包帯をしていた。この世界では珍しくもなにもない普通の少年である。

彼の仕事は傭兵。今この世界ではウルキア帝国とバニア王国の間で戦争が起こっている。そのための傭兵である。先日までいた隊は全滅し、彼はまた新しい隊を探してバニアの前戦都市『アリア』にいた。

『おい、その黒いの』

突然後ろから声をかけられ振り返る。そこには上半身裸の色黒の男が戦斧を担いで立っていた。

『全身真っ黒…今噂の…、破砕者…、みてえだな』

“破砕者” 敵味方問わず全てを無に帰す者

今戦場でそんな噂が出回っている。

『まさか…』

ゼロは恥ずかしそうに笑った。

『俺はガンツ。よかつたらうちに来ないか？お前の眼が気に入った
！！』

そう行つて右手を差し出す。他に行くあてもないゼロは、

『いいのか？』

迷いながらもその右手に答えた。

ガンツの隊は20人くらいの小隊だったがそれぞれ皆体格の良い大男だった。

『これが俺の仲間“ラッシュ”だ』

自慢気に紹介した。確かに名前の通りな気がする。

『ゼロです。よろしく』

自分がこの隊に入ってもいいのかわ不安だが、一度了承したらしかない。

『明日から出るから今日はしっかり飲め。』

背中をドンと叩かれて周りを見た。みんな笑っていた。

夜はみんな酒を飲んだ。

『お前はどこの出身なんだ？』

不意に聞かれて困ってしまった。

『わからない…気がついたら戦場にいたんだ。』

みんな笑っている。

『ここにいる奴はみんな似たようなもんだ。全部戦争のせいだ。』
隊の副隊長ケルトは言った。

『だからこそこんな戦争早く終わっちまえばいい。まあ終わったら俺らは働き場所がなくなるんだがな！！』

みんな酒を飲みながら笑った。

『そういえば前の戦でやつが出たらしい』

誰かが言う。

『奴って“破砕者”か？』

『ああ…なんでも街ひとつ消したってよ』

『そんだけ強けりゃ、味方にできたら俺らも大金持ちだな』

みんなが笑う中、ゼロだけ笑えなかった。左手が疼いた。

明朝、ラッシュは岩陰に潜んでいた。

『この谷を食料輸送が通る。俺らはそれを狙えばいい。』

今日の任務は食料経路を絶つこと。通る場所さえおさえておけば簡単な任務だった。

『今回は楽勝だ。俺が合図したらケルトと半分は回り込め。次の合

図で一氣に落とすぞ!!」

ガンツは興奮を押さえられずに肩を揺らしながら指示する。

「きた!!」

見張り役が指示を出す。

「行け!!」

ガンツの合図とともに、ケルトと数人が後ろに周り込む。相手は、馬車4台に護衛が10人ほどだった。

「今だ!!」

ガンツのかけ声で一斉に飛び出す。事態は一一瞬で着いた。ラッシュの名前に恥じない素晴らしい突撃で護衛は一瞬で息絶えた。

「全く護衛になってねえな」

ガンツは得意気に馬車を見つめる。

一本の矢が事態を急変させた。それは遠くからの一本だった。誰にも当たらなかったが、その矢が敵の存在を知らせた。

「マズいぞ!!伏兵だ!!!!うっ……」

見張り役はその叫びと同時に射ぬかれた。

「撤退だあ!!!!」

ガンツの叫び声と同時に無数の矢が飛んでくる。敵はラッシュの3倍…60人の弓部隊だった。

ラッシュは必死で矢の雨の中を逃げた。

ただ1人……

ゼロを除いて………

彼は笑っていた。

彼は彼ではなかった。

いつの間にか包帯はなくなっていた。

その左手は黒く燃えていた。

いつの間にか彼は黒い半面の仮面をつけていた。

仮面は笑っていた。

そして矢と敵は全て燃えていた…

黒く黒く…燃えていた…

ラッシュ隊はアリアに戻っていた。隊は3分の2に減り、皆負傷し

ていた。

そこに機嫌の悪そうなガンツが歩いてきた。

『報酬は0。役人どもは

「伏兵は想定外だが、私たちの知ったことではない」だによ!!!
!ふざけるな!!!』

そう言つて近くの壁を思いつきり殴った。上からホコリが落ちてくる。

『まあ落ち着けよ。収入0はキツイが生きてるだけマシだろ?』

ケルトは疲れたように続ける。

『それにしてもゼロには悪いことしたな…いきなりあんなことになつて死んじまうとはな』

周りも気まずそうにうなだれていた。

『勝手に殺すなよ』

『!!!???』

一斉に振り返る。壁に寄りかかるようにゼロは立っていた。

『生きてたのか!!!??逃げ遅れて死んだと思つてたぞ!!!』

ガンツが大腿で歩み寄り肩をたたく。

『ちよっ……痛いから。あそこで気を失つてたんだ。それで気づいたら誰もいなくてさ。むしろそつちが生きてたのか不安だったよ。』
みんな負傷していることなど忘れて大笑いした。

夜ゼロは夢を見る

自分が自分じゃない夢

暗い暗い闇のそこから

何かが手招きをしている

『もつとちょうだい』

『たりないよ』

それはどんどん膨らんで

それはどんどん暗くなっていく

そのままゼロは闇に引き込まれていった……

『大丈夫か？』

ケルトの声で目が覚めた。

『だいぶうなされてみたいだぞ』

全身から汗が吹き出していた。

『大丈夫。ありがとう』そう言ってゼロは外に出た。

外は満月で明るかった。少し肌寒くてその寒さが汗を冷やして気持ちよかった。

『みいつけた……』

満月の反対側の夜空の闇でそいつは見つめながら笑っていた。

そいつは宙に浮いた車輪のついた椅子に座っていた。

『あれが憤怒か……』

つい口元が緩む。帝国中を探し回ったが見つからなかった。もしかや
と思い来てみればいきなり正解。笑わずにはいられない。

『ここにいるってことは…覚醒はまだか…』
彼の中である名案が浮かんだ。その案を実行すべく椅子はゆっくり降りていく。

『こんばんは』

不意に後ろから声がして、ゼロは驚いて振り返った。

『誰だ？』

そこには奇妙な男がいた。車輪がついた大きな椅子に座る小人。乗っていると言った方が正確かもしれない。小人にはねじれた角がはえていた。その時点で、ゼロはこれが人では成らざるものだと理解した。

『いい夜ですね』

それは薄気味悪い笑みを浮かべながら、顎に生えたひげをなでる。

『質問に答えろ！！』

ゼロは剣に手をかけて威嚇する。それでもそれはなんの変化も持たない。まるでゼロの剣はおもちゃであるかのように、全く動じなかった。

『私は帝国七神“怠惰のベルフェゴール”』

帝国七神？

ゼロの頭には聞き覚えのある言葉だったが、いつ聞いたのか全く思い出せなかった。

『私は争いは好みません。あなたの力が欲しいのです。』
ベルフェゴールはそう言いながらゆっくり椅子を進ませてる。
『あなたも気づいているはずです。自分が人ではないことに…あなたは……』

ゼロは剣を抜いた。横切りで放ったその剣は、椅子の俊敏な後退によって空振りに終わった。

『俺は俺だ！！！！！』

ゼロの顔には怒りが満ちていた。左手の包帯の合間から、時折黒いもやが立ち込めていた。

それを確認したベルフェゴールは満足そうに笑った。

『言ったでしょう？私は争いは好みません。今日はもう帰ります。しかし忘れないでください。あなたは私たちの仲間なんですから…』
そう言い残して闇に消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8663e/>

“ 破砕者 ”

2010年10月10日17時03分発行